

十二月例会 平成三年十二月二十一日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

池田謙齋生誕百五十年、石黒忠恵没後五十年記念例会

一 池田謙齋、石黒忠恵について

酒井 シヅ

一 池田文書について

深瀬 泰且

一 池田文書からみた池田謙齋、石黒忠恵

遠藤 正治

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

森川政一著『明治・大正上越医界史』

新潟県はおおよそ六つの文化圏がある。

古来佐渡ヶ島は一島天領で、特異な文化圏である。村上市中心の岩船文化圏、新発田市、新潟市中心の下越文化圏、三条市、長岡市、柏崎市を中心とした中越文化圏、魚沼三部の文化圏、旧直江津市、高田市を中心とし、米山山塊から南部、中頸城郡、東頸城郡、西頸城郡を含めた上越文化圏の六つである。旧高田藩、清崎藩領と大小の代官所支配地が混在し長期にわたって領主が交代しなかったので、落着いた文化が成熟していた。その精神風土が医界にも影響してか、派手ではないが、県南の知性を代表する医療人が育ってきた。

著者もその一人で、県下私立病院の名門知命堂病院四代目の院長であり、すでに『知命堂病院百年史』昭和五十七年刊、『知

命堂病院附属産婆看護婦養成所史』昭和六十二年刊という二冊の著作がある。知命堂病院は英医ウィリアム・ウィリスに親炙した瀬尾玄弘が創立した近代的病院で、創立以来、火災、天災にもあわず、創立以来の文書、図書が豊富に保存されている。それに、創立以来、この上越地方の中心的医療機関として医療界のリーダーシップをとってきいてきた。従って上越地方医療活動、医師会関係の文書もあまり散ずることなく保管されていた。これらの資料をもとに、郷土史家をはじめ、著者の長年の医療活動に培われた人脈をたどって、地域内を足で歩かれてまとめられたのがこの医界史である。医師会史というのが全国で刊行されているが、無味乾燥で面白くないものが多い。

医界史なので、読み始めると先人医師の逸話や業績が平易達意の文章でまとめられているのが面白い。著者の血族にあたる、瀬尾原始、菅沼定男、瀬尾貞信、森成麟造など日本的に有名な医師たちの、親戚の者でなければわからぬような隠れた話が記録されている。

この医界史は「地方疾病史」から始まるところがまたユニークで、興味をそそる。

第一章「上越地方の疾病と医療」は痘瘡、コレラ、チフスなどの法定伝染病の対策史を中心に約五〇ページを占めるほど書き込まれている。

第二章「上越の検梅院と梅毒対策」として、港町直江津、軍隊のあった高田の売春対策の実体に触れ、第三章「上越地方の医療啓蒙活動」へと展開し、通俗衛生会から保健所設置までへの道の

りについで具体的な資料を紹介する。

第四章は「都市医師会の成立と変遷」で、洋漢混成の同業組合からの発展過程を明らかにし、その推進者藤林道徳、宮川環、川室貫治などの業績にふれている人物風土記でもある。

第五章「上越地方の病院」では地方医界が近代化してゆく実情を公立高田病院と私立知命堂病院を軸として、病理解剖、学術研究会の実態、看護婦・助産婦の養成などまで競合してゆくプロセスについて詳細な検討が行われている。

精神病院、衛戍病院のこと、私立病院のこと、郡病院の分院についても分析している。

第六章では上越医界が早くから各種の医学研究会を持ち、知命堂病院医事談話会は明治二十五年から開始されている。公立高田病院の高田医師研究会はこれより十五年も遅れているが、やがて北越医学会として全県的に統合されるまで独自の学術活動が継続されているのも興味深い。各時代の医師の努力の跡を知る。

地方医療技術近代化の指標としてレントゲン装置の導入を取りあげ、第八章にあてている。

明治四十三年に第十三師団高田衛戍病院に設置され、それを中心として普及し、医療技術の近代化が企てられる端緒となったのも面白い。第十章は上越地方の医師の動きと人物誌について八十頁余が費やされている。

幕末、明治初期の激動期に藩医、町医の動きを、高田地区のほか、中頸城郡を更に三地区に分け、高田隣接地、頸南、頸北の各地区ごとに理解し易いように整理し紹介している。

西頸城郡も糸魚川地区、能生地区、名立、青海地区と小文化圏ごとに医師のなまの人物像の紹介が行われている。この地方出身の医学者の小伝の他に「異色の医師達」として瀬尾玄弘を初め、盲人教育に地味な活動をした杉本直形、大森隆碩、小島彦造などとかく埋れてしまいがちな地方医師たちの詳細な履歴と業績を掘り起したのは有り難いことである。

夏目漱石の関係と歴史考古学者としての森成麟造の二つの顔についての興味深い記述もある。欲をいえば、異色の医師達の中に、宣教医師へボンについて眼科を学んだ。川室道一についての記述があれば、上越におけるアメリカ医学の導入物語を加えることができ、より面白くなったのではないかと思われる。

巻末を占める五〇ページは各時代ごとの医師の名簿。極めて貴重であり、著者の緻密な心くばりある人柄がにじみ出ている。各時代ごと、各地区ごとに、出来る限りの人物像と行動が注記されている。文献により、聞き書によりほとんど空欄がなく、単なる名簿に終っていないのは見事というほかはない。

著者の古稀の祝としての素晴らしい道標であり、昭和時代の上越医界史のまとめを期待したい。

(蒲原 宏)

〔北越出版、一九九〇年、A5判、五一四頁、定価五、〇〇〇円〕